

子どもと社会 お総菜が結ぶ

和歌山の自立援助ホーム

就業体験・アルバイトの場 開店

和歌山市加太の海の近くにある自立援助ホーム「ゆるりのまきは」が総菜屋をはじめた。子どもたちの働く場とするとともに、地域の人が愛する食堂にもなることをめざしている。

一般社団法人の児童養護施設支援協会（岩出市）が営む「まきは」には、児童養護施設を出たり親と暮らせなかったりする15歳から20歳までがひとつ屋根の下で暮らしている。

ここでの共同生活それぞれがひとりでに備える学びだが、「まきは」の「卒業生」を探る会社がどれほどあるのかという問題がある。「両親に育てられる」という「普通」から排除された子どもは人との関係を「普通」にむすぶ力が弱いことがあり、「協調性が無い」と見なされて企業は敬遠しがちだ。

そこで、「まきは」のとなりの空き家を借りて改装し、子どもたちがアルバイト

トをして就業体験ができる総菜屋をつくった。

さしあたっての販売先は紀の川市の高齢者だ。体験をしにくる市内38カ所の集会所に支援協会の関連会社が飲みものを無料で提供するかわりに、魚の煮つけや野菜のおひたしといった手づくり総菜を希望者に販売できるようにした。売り上げを安定させる工夫だ。

コロナ禍で滞っている機材の運び入れがすすめは借家の改修を今の調理場だけから一階全体にひろげて、加太の住民が買いにくる弁当屋を併設することも考えている。これは6月の開店をめざしている。

総菜屋の開店は、エリナさん（18）のアルバイト先を確保するという喫緊の課題の解決をせまられていたからでもあった。

エリナさんは、親が病弱でいっしょに暮らせないため昨秋に「まきは」に入った。4月からは、ケアワーカーの仕事に就く資格をとるために学校に通っている。「私の親を献身的に支えてくれた人のように人をサポートできる人になりたい」と話している。

進学が決まったとたんに問題となったのが学費の支払いだ。一部は贈与型の奨学金でまかなうが、のこりに貸与型をつかって借金を背負うことは避けたいというエリナさんの望みをうけて、急ぎ設けたのが総菜屋だった。

楽しんだ釣果 食材に

総菜屋には支援者がたくさんいる。加太の海に4隻の釣り船をはしらせている有限会社マール（三邦丸）の社長三尾浩司さん（53）もそのひとりだ。加太の魚を食材に使ってと無償で提供している。社会貢献という言葉はどうにも照れくさいらしくて、「会社の宣伝になると」という打算からです」と語る。

創業は1981年。漁師だった父親が始め、三尾さんが継いだ。三尾さんによると、釣り人の気質が40年

支援協会は「加太の人と交流することで、支えてくれる大人が身近にいるんだ」ということを気づいてもらう場所にもしたい」と願っている。エリナさんは「どんなお客さんがくるのかな」と不安と楽しみとが半々です」と調理場で話した。

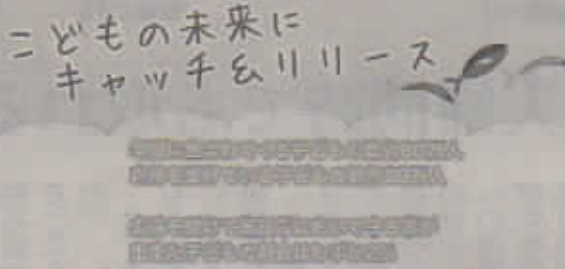
間でも大きく変わったという。昔は魚を食べるために釣っていたが今は釣ることだけを楽しむ人が多く、せつかくの釣果を捨てることもある。潮の流れがはやい加太の海で育っているから身が引きしまつてうまいガシラ（カサゴ）・アジ・イシモチ・ハマチなどをだ。

「こうした魚の行き先をつかってあげられるし、私の魚が役に立つならばと釣り人も捨てる罪悪感をいだかず釣りをたのしめますし」

たのしい釣りが「子どもたちへのほんの少しのお手伝い」（三尾さん）につながるマールの予約は、電話050・3532・9619へ。早朝に出航して昼まで6時間の釣りをたのしむ乗台船（1人税込み5600円）が今の季節は人気だ。



開店準備をするエリナさん（和歌山市）



支援を呼びかけるポスター（児童養護施設支援協会提供）



「釣って支援」を呼びかけるマール（三邦丸）（和歌山市加太）